

氏名(本籍)	^{たけ} 武 ^い 井 ^{もと} 基 ^{あき} 晃 (山梨県)
学位の種類	博士(文学)
学位記番号	博甲第3579号
学位授与年月日	平成17年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	歴史・人類学研究科
学位論文題目	民俗的歴史観の研究
主査	筑波大学教授 博士(文学) 古家信平
副査	筑波大学教授 博士(文学) 真野俊和
副査	筑波大学助教授 博士(文学) 伊藤純郎

論文の内容の要旨

本論文は、現在の民俗社会において、史実を参照しながら独自の意味付けをもって構成される民俗的歴史観について、歴史的背景の異なる二地域の事例をふまえて考察する。過去の象徴的な出来事を選定し、構成される歴史観の地域的特性と、その形成過程において伝承が書き留められ、伝承を補う相互作用に注目し、歴史観の共有がある種の「縁」として人々を結集させ、時に排他性を持ちうることを示し、「史縁」の概念を提起する。

序論では、先行研究を批判しつつ、民俗的歴史観が文字資料と伝承を継承する一方、再構成することによって生み出されることを述べ、まとめ役の人物に注目すべきことと、調査者の積極的関与にも目配りする必要性を主張する。

第1章「仙台藩要害の地－歴史的背景－」では、北上市上口内の近世仙台藩の地方知行制によって成立した中嶋家に従う下級武士の子孫が、「武士気質」を持ち続け、藩政時代の制度に由来する擬制的オヤコ関係を保ち、生業としての傘作りに携わり、周囲の意識もそれを認めていたことを、実地調査資料を示しながら論述する。

第2章「武士の子孫の擬制的同族関係－その軌道修正についての考察－」では、中嶋家中に広まっていた藩政時代の「家附親類」と、それに由来するタノミホンケという維新後にできた制度を検討する。農家のタノミホンケでは、本家の庇護に対して分家にさまざまな奉仕が課され、マキ(同族団)を基盤としているのと比べて、下級武士間の制度には頼む側の義務が希薄で、家の系譜関係まで擬制しておらず、組み合わせも柔軟なことを指摘する。そうした地縁でも血縁でもない、過去に求められる象徴的な関係を史縁とみなすことができ、今日的には少子化、高齢化、過疎化への対応策として、これまでの制度を再利用していることも指摘している。

第3章「歴史調べと知識量の多寡－岩手県北上市口内町－」では、文字記録をもとに武士の系譜を明らかにしようとする最近の歴史調べ運動を取り上げ、中嶋家中と仙台藩から預けられた御預足軽を検討する。これらは同じく武士の子孫でありながらも別の伝承を持ち、史縁によってつながる集団(史縁集団)としては別個であることを明らかにし、文字記録の効果的な活用が集団の凝集性を高めることを指摘する。周辺の農家においては念仏剣舞などの芸能が、文字記録に匹敵する位置づけを得ており、史縁を形成する素材の多様

性にもふれている。

第4章「琉球王府時代の屋取村－歴史的背景－」では、琉球王国の首都、首里の人口問題・士族の就職難の解決法として、士族が帰農し、それによって形成された集落が屋取といわれ、それ以前からあったいわゆる古村との間に緊張関係が生じてきた歴史をまとめる。明治以降に行政区として屋取が独立する場合と、逆に古村と一体化する場合があるが、そこには互いに乗り越えがたい史縁による結びつきが存在することを指摘する。

第5章「字内部の史縁的差異の解消－沖縄県中頭郡中城村－」では、第4章の指摘を具体的に中城村の3行政区で検討する。古村では共有地・墓地と代々の聖地、拝所およびそれに付随する行事、それに関連する芸能が体系的に備わっているため、屋取ではそれらに対抗できるだけのものを創造しようとするが、ムラとしての一体性は古村とは異なっており、そこに史縁による差異を読み取っている。

第6章「系図作りによる門中の歴史の確認－沖縄県中頭郡中城村－」では、士族系門中と百姓系門中における系図作成の現状を検討し、伝承の収斂によって民俗的歴史観が形成される様態を明らかにする。近年、血筋を優先して系譜を固定する動きが見られるが、それを拒否するところに史縁の論理を優位におく発想が見られることを指摘する。

第7章「伝承の収斂の担い手－伝承者と調査者の共同－」では、北上と中城で歴史調べに積極的に関与した伝承者と、作り上げられた文字記録を検討し、伝承の収斂を意図していること、さらにそうした運動に調査者が介入し知識の収斂に一定の役割を果たすことが指摘される。

結論では、歴史的・地域的偏差はあるものの、北上と中城の両地域に歴史調べの運動とそこに史縁の論理が共通して見いだされ、伝承の収斂を図る伝承者が存在することが明らかとなる。先祖像と将来に自らの現在を引き継ぐ子孫像を共有できるのが史縁集団であり、歴史調べは将来を展望する運動でもあることを主張する。

審査の結果の要旨

本論文は現在の民俗社会において、人々が試みている歴史調べ運動を、具体的に北上市と中頭郡中城村における長期の実地調査の成果を踏まえて検討し、史縁および史縁集団という概念を提起して、民俗的歴史観の研究に新たな展望を与えるものである。

民俗社会には多くの文字記録が残されており、いろいろな機会にさまざまな解釈がなされ、散漫であった説明がひとつに像を結び、まとめられることを繰り返してきた。この論文は史実としては疑問がもたれる資料であっても、現在、それらを意味づけて次の世代に引き渡そうという運動を取り上げており、史縁の概念で解釈しようとした現代民俗論の大きな成果である。沖縄で対象となっている屋取は、沖縄全体の集落の比率から言っても無視できないものであったにもかかわらず、これまで十分な検討がなされてこなかったものであり、これを正面から取り上げて研究の対象としたことに、まず研究史上の意味がある。歴史的背景の異なる二地域において、素材や手法は異なっているが、いずれも歴史調べを行っていることを述べ、その検討から史縁によるつながりが血縁および地縁に対抗できるほどの位置づけをなしようと指摘したことは、民俗研究に大いに寄与するものである。また、そうした側面から2つの民俗社会を描いた民俗誌ともなっており、その点での学術的意義も認めることができる。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。